

創刊号発刊によせて

立命館 史資料センター長 木立 雅朗

この度、立命館史資料センター紀要を刊行する運びとなりました。

立命館史資料センターは二〇一五年一〇月に開設されました。『立命館百年史』編纂の過程で収集した膨大な史資料を受け継ぎ、その保存と利活用に努めています。また、『立命館百年史』刊行後も史資料センターには多くの貴重な史資料が寄せられており、その収集も継続しています。

現在、多くの大学で当センター同様の施設が設置され活発な活動を続けていますが、本学の取り組みはやや遅れ気味です。しかし、関係者の健闘により徐々に史資料の蓄積と研究が進んでいます。

記念すべき創刊号は創立者・中川小十郎をテーマとしています。以下、簡単に紹介します。山崎有恒「中川小十郎の教育理念と戦後を創った卒業生たち―戦前期立命館大学再考―」は小十郎の教育理念をこれまでとは異なる視点から掘り起こしており、彼の人物像を大きく変換しています。「戦前期立命館大学再考」の副題が本当にふさわしいものだと思います。奈良勝司「人見・中川両苗の由緒意識と近世「幕末社会」は丹波の「郷土」人見・中川両苗が中央政局の複雑な暗闘に巻き込まれてゆくさまを中川家史料から丁寧に掘り起こし、小十郎のバックボーンイメージを変えています。藤野真拳「明治ナシヨナリズムと中川小十郎のキャ

リア形成(二)―東北地方小学校教員の統計調査経験―は小十郎の学生時代の教育活動を掘り起こし、「立身出世世代のリアルな野心」を見ています。眞杉侑里「樺太庁制初期における入植と産業振興の問題―植民地樺太に対する期待と産業方針―」は樺太庁制初期の政策について論じ、「中川第一部長」の活動の一端を明らかにしています。十河和貴「台湾銀行頭取時代の中川小十郎と南進への理想―戦後不況と積極的財政整理方針の終焉―」は台湾銀行頭取時代の小十郎の南進思想とその挫折を明らかにしています。木多悠介・小林愛恵・十河和貴・長谷川澄夫「『中川家史料』田上綽俊書翰」は、小十郎の少年時代の漢学教師の書簡を紹介しています。奈良論文と同じく、小十郎のバックボーンを明らかにする仕事になります。寺澤優「二〇一三―二〇一五年における『中川家史料』整理の概要と報告」は中川家史料の整理の状況を報告しています。

これらの研究の多くは史資料センターが収集した新たな資料に基づいており、その活動の大きな成果だと思えます。史資料センターは目立たない組織かも知れませんが、本書の成果は創立者の歴史的イメージを交換させるだけにとどまらず、彼を生み出した当時の地域社会や日本社会の在り方をもあぶり出しています。決して狭い意味での「学園史」に留まりません。本センターが活動を続ける限り、今後とも新たな資料が増加し、新たな解釈が生まれてゆくことでしょう。

史資料センターの活動と役割はさらに広がり、学園は当然のこと、社会的にも重要なものになってゆくと思います。今後とも関係各位のご協力をお願いいたします。

二〇一八年三月三〇日